Osaka University Knowledge Archive

Title	当事者による主体的な問題解決をめざして
Author(s)	森本, 真輔
Citation	未来共生学. 2018, 5, p. 330-331
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/68225
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

当事者による主体的な問題解決をめざして

アデオジャパン
森本真輔

アデオジャパンは、ケニアに本部を構えるADEOの側方支援組織として、2003年より日本人のインターンシップ研修生を派遣してきた。これまでの研修生は20名を超えるが、研修に際して特にノルマのようなものを課すことは無く、ただ「研修生が見たいものを見て、取り組むべきと思ったフィールドの課題に取り組んで欲しい」と送り出してきた。今回の研修生である小川さんはフィールドで活動する中で、ADEOの資金面での課題や活動の停滞状況を見て、自ら主体的に新規事業計画立案のための調査とステークホルダー間の調整業務に取り組んでくれた、と理解している。

ADEOが活動するフィールドでは、これまでも多くの研修生が様々な困難や矛盾に直面してきた。資金難からプロジェクトが途中で頓挫することもあれば、現地でカウンターパートとなるスタッフのサボタージュに頭を悩ませた研修生もいた。また、今回小川さんが描出したような、被支援者との信頼関係・権力関係に問題意識を感じた研修生も少なくない。

それでもADEOおよびそのフィールドと10年以上関わっていると、失敗も成功も含めた等身大の「変化」が、そこに見て取れる。ADEOはケニア人が立ち上げたケニアのNGOで、まだまだ「発展途上」なのだ。現地への貢献という意味でも、組織運営も、もっと言えば資金力や人材面も、まだまだ改善の余地がある。

アデオジャパンもADEOも、「当事者が主体的に問題を解決していける状態を作ること」を、フィールドにおける支援のゴールと位置付けているが、欧米や日本といった先進国に本部を置く「北のNGO」が幅を利かせる援助業界においては、「南のNGO」であるADEOが成長していくこと自体が、一段メタなレベルで、「当事者が主体的に問題を解決していける状態」をめざす取り組みになる、と捉えている。

小川さんは今回の活動を通じて、「支援する側」と「支援される側」という立場が生む権力関係に注意を払いながら、同時にフィールドの各ステークホルダーの納得感と公平性をいかに担保するか、という視点を最後まで貫き、プロジェクトを前に進めてくれた。小川さんの視点やものごとの進め方、コミュニケーションの取り方は、ADEOのフィールドスタッフにとっても大きな刺激となったのではないだろうか。団体を代表し、この場をお借りして感謝を申し上げたい。

私が学生時代にフィールドオフィスを訪れた際、ADEOの代表は「一度で関係を終わらせないことが大事だ。継続することに意味がある」と話してくれた。何事もゆっくり変化していくケニアにおける大切な心構えを教えてもらったと、今でも印象に残っている。小川さんのケニアでの研究が今後も継続し、大きな成果となっていくことを願っている。